

大津と山邊

高田 友

大津皇子の妃にて、背の君に殉じたる山邊皇女に永井路子氏は「やまのへのひめみこ」とルビを施し給ふ。「やまのべ」にあらず、また「やまのえ」にあらず。假名遣のみならで、我儕が口頭にて讀まんにも、「ヤムノへ (Yamanoha)」と申すべし、との由。

萬葉特有の語に就きては、現代人が發音せんには、ハ行轉呼音を用ゐず、「思ほゆ」の如きは「オモオユ」にあらず、「オモホユ」とするが常道なり。

大津は大海人皇子（天武天皇）の皇子なれど、近江大津宮にて、御父と確執ありし御伯父・天智天皇に鍾愛せらる。異としたまふなかれ、大津の生母は天智天皇皇女の大田皇女。すなはち、大津は天智天皇の外孫なりき。但、「大津皇子」の御名は大津宮に由來するにあらず。白村江の戦に赴き給ふ皇家一統の博多「那の津」におはしますの砌に生誕ありしによりて、那の津の異名「大津」を採りたるなり。

「津」は「港」の義にして、オックスフォード (Oxford) を「牛津」と記するは、fordの「淺瀬」なるに據り、牽強付會して「港」、更に「津」とは解したりけん。近江の都も博多も「大いなる港」なるを想起せられよかし。それにつけても奇怪なるは、オックスフォードの海に臨まざるの儀なり。

扱、大津皇子は五歳にして母を喪ひ、爾來同母姉大伯皇女と俱に外祖父天智天皇の許にて傳育せらる。天智帝、敕を以て我が別儀の皇女たる山邊皇女をして大津に嫁がしめ給ふ。天智崩御の年、大津山邊はいづれも九歳なれば、遺敕なるべし。叔母と甥とは申す條、同年の御出生なり。

豈料らんや、大津は父帝の崩後、亡き御母の同母妹なる持統天皇（毘野讚良皇女／天武皇后）に嫉視せられて死を賜はる。女帝、大津こそ我が所生の草壁皇子登極の障りなるらめと危惧したまひければなり。

山邊皇女、訃報に接し、髪振り亂して奔り行き、磐余の池に入水して竟んぬ。時にいづれも二十四歳。

山邊皇女は蘇我赤兄の外孫。赤兄はかつて中大兄皇子（天智天皇）に追従して有間皇子ありまのみこを出賣うらぎり、後に大津宮にて大友皇子（弘文天皇／天智皇子）の台閣いちのかみに出頭、一上（左大臣）をぞ務めたりける。

すなはち皇女の父帝ふていと外祖父と相謀りて若き皇子に死を致まねく。赤兄は壬申の亂に敗れていづこともなく配流せられ、末期の如何なりしやを知る人ぞなき。今その外孫ぐわいそんじよ女また自裁の悲哀を味はふに至れり。

蘇我赤兄には異母兄蘇我倉山田石川麻呂および同母兄蘇我日向ひむかあり。日向は石川麻呂の長女、中大兄皇子の後宮に入らんとするに、これと情を通じて入内の儀を空しうせしむ。石川麻呂不得已やむをえずして、次女越智娘せちのいらつめを皇太子に捧げ、娘いらつめ所生の皇女すなはち大田および讚良なりき。

加之、從是これより星霜けみ閱すること五年、日向、兄を讒して死に至らしむ。中大兄、その讒なるを知りて、敢へて赤心の大官を誅せりと。

而して今また、女帝に密奏して大津皇子を陥れたるは山邊皇女の異母兄河島皇子なりき。畏き邊りあたの怨讐みだ、因果應報なんすれぞ何爲なんすれぞ戰慄せられであるべけん。

（令和二年八月十五日受附）